

## 山梨学院法科大学院紀要の創刊に寄せて

著者名(日)	小野寺 規夫
雑誌名	山梨学院ロー・ジャーナル
巻	1
ページ	3-5
発行年	2005-10-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1188/00000140/">http://id.nii.ac.jp/1188/00000140/</a>

## 山梨学院法科大学院紀要の創刊に寄せて

研究科長 小野寺規夫

山梨学院大学法科大学院は、2004年4月に他の67校の法科大学院と一緒に無事に誕生した。さらに今年度は、他に6校が法科大学院への仲間入りをした。私たちのこの1年間を振り返ってみると、率直に言って、それは、苦勞の連続であったといえることができる。学生諸君はもとより、教える立場にあった教員の側には、その苦勞が多かったといってもよい。それは、一言で言えば、まさにこれまでの大学教員として、全く経験をしたことのない大海へ、泳ぎ方も知らずに投げだされたともいうべき状況であった。

大学における学部教育の現状は、教える立場にある教員に新しい試練を求めている。特に法科大学院では、実務教育の必要性という観点から、研究者としての教員よりは、教育者としての教員が求められていると、言ってもよいであろう。それは、法科大学院における教育では、新しい法曹養成の理念に沿った研究・教育活動が求められている。特に、司法に関する実務的な教育方法が求められているのである。そのための方針・方法をめぐって、研究者教員・実務家教員の誰もが、暗中模索の状況の中での苦闘の1年間であった。

新しい法科大学院が目指す法曹養成に関する研究・教育活動については、教える教員の立場からすると、現状では、研究活動よりは、まさに教育実施活動に主体性を置くべきだと考えられているように思われる。教える側、それを習得する側、共にそこでの研究体制については、未知の分野が多すぎるのである。例えば、双方向性教育というが、現実には、そのための基礎的な基盤ができていなければ、その実施をしてみても、その効果を認定することは不可能に

近いということができる。特に教える立場の教員には、全く未知の世界であり、教えるという相手のあることから、その理想像を描きながらも現実はずっと予期しない事態となってしまった。単に教えたという自己満足だけが残った。理想と現実の違いを意識させられる毎日であった。そのことも加わって、研究者としての研究活動の時間的な余裕は全くないという状況を呈したのである。

そこで、研究者教員の研究生活を充実させるためには、法科大学院での教育実習の後には、改めて研究者として研究に専念する時間が必要であることを痛感させられている。

そこで、思い切った結論を先に言おう。一つの提案ではあるが、法科大学院での過酷な教育に従事する期間は、研究者教員としては、せいぜい3年間で限度と考えるべきであろう。そこで、法科大学院での教育期間が3年を経過した後、その後の3年間は、教育活動に専念できる時間的な余裕を作り出すことである。そのためには、法科大学院専任から学部に戻って、そこでの研究に専念する期間を設けることが必要であり、そこでの研究生活の後に改めて法科大学院での教育に従事するという制度が求められると言うべきである。そのような機構を各大学は、大学全体としての研究・教育体制を考え、大学の機構を再構築することである。

私たちは、つらい毎日の研究・教育体制のなかで、自分の研究分野についての研鑽を常に考えてきた。それは、学部における研究体制のなかでの研究とは異なる姿勢のなかから生まれてきたものと言うことができる。あるべき姿の法科大学院教育は、理論と実務の融合を図り、新しい実務家の養成に新しい分野を開拓する者でなければならないであろう。

本学においては、自己の研究を大事の育てようとする研究者の立場から、専門の研究の成果を発表する機会をつくろうとの機運は、常に研究者の側から聞こえてきていた。その高まりが本紀要の発刊のばねとなり実現に向けての発進となったのである。その一端が、ここで結実した。そのエネルギーには感心す

る。苦しい毎日の研究・教育のなかで、あたらしく模索をかさねそれを発表することができるようになったのである。

この4月で、2年目に入る。今後に艱難辛苦は目に見えてくる。しかし、ここでくじけてはいけない。ここでの第一歩は、前を向いて進まなければならない。次の後輩へのバトンタッチまで頑張らなければならないのだ。これが、最初の発信基地となり、将来の本学の卒業生の研究結果の発表の場となり、さらには、在学生にとっても、自由に自己の研究結果を発表することの場となることを期待している。

ここに最初の「山梨学院 ロー・ジャーナル」を発刊する運びとなった。関係者の皆様のご苦勞に心から感謝すると共に、この喜びの気持ちを率直に表明したいと考える。

(平成17年3月28日記)